

平成 21年 5月 29日現在

研究種目：基盤研究（C）  
研究期間：2006～2008  
課題番号：18520137  
研究課題名（和文） 「歴史社会学派」の歴史的行跡の研究、ならびに基礎資料のデータベース化  
研究課題名（英文） Study on “historical-sociological studies”  
研究代表者  
藤村 耕治（FUJIMURA KOUJI）  
法政大学・文学部・准教授  
研究者番号：00328915

研究成果の概要：日本の国文学研究方法を革新したといえる「歴史社会学派」は、活動を開始した戦前期から、戦後の長い期間にわたって学界に大きな影響を与えてきた。本研究では、この学派の出発期の活動を中心に、入手困難な貴重資料のCD-ROM化、年表・参考文献の整備などを行い、かつ学派の中心人物の一人であった近藤忠義についての再検討を行った。その成果はひとまず、「近藤忠義・人と学問」第一集・第四集ならびに「歴史社会学派研究・資料編」にまとめられた。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,000,000	0	1,000,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	510,000	3,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：国文学、研究史、歴史社会学派、近藤忠義

## 1. 研究開始当初の背景

昭和十年前後、訓詁注釈や文献学など実証的な方法が一般的であった国文学研究において、また主観的で恣意的な鑑賞主義に傾ききらいのあった文学享受のありように対して、文学作品を歴史的・社会的な状況において科学的に考究するという、根本的な方法論の革

新を提唱した歴史社会学派は、同時に研究者個人の生き方や主体性を重視するという点においても、従来にない新しい文学運動であった。研究史的には、戦前の一時期にマルクス主義的な歴史認識・社会認識を持った一群の文学研究者で、戦時色が強くなっていくにつれ発言の機会をなくしていった、というのが

狭義のいわゆる歴史社会学派に対する一般的な見方であろう。その初期理論は主に鑑賞主義論争や文芸学論争といった、方法を異にする諸派との論の応酬といった形で表され、精緻な理論体系として整備されたものではないし、例えば近接するマルクス主義文学・批評理論ほどには受け入れられなかった観もある。けれども、たとえば彼らの方法が古典研究の成果として示された『日本古典読本』は、後続するシリーズも含め、戦時下においても版を重ね、国民の啓蒙に大きく寄与した。その認識や研究方法については、戦後発足した日本文学協会を中心に、長い間に亘って持続的に継承・発展された面が数多くあるのは確かである。さまざまな点で批判や問題点はあっても、歴史社会学派が戦後の日本文学研究の基礎を作ったといっても過言ではない。

歴史社会学派の活動は、このように戦前・戦後の日本文学研究史上で画期的な役割を果たし、大きな影響力を持ったにもかかわらず、これまであまり深く、まとまった研究がなされてこなかったといわざるを得ない。先行研究の数もそう多くはなく、具体的に誰が広い意味でのこの学派に属し、いつごろまで求心力をもった活動たりえたかなど、必ずしも自明ではない。

この重要な文学研究運動を、その初期段階から縁の深かった法政大学国文科（現在は日本文学科）の先達たちの仕事を中心に、一度徹底的に見直してみる必要がある、という問題意識が本研究のきっかけとなった。法政大学国文学会が現在発行している学会誌『日本文学誌要』の前身、『国文学誌要』が当時法政大学に赴任したばかりの近藤忠義の尽力でまずはタブロイド版の形式で創刊されたのは一九三三年一二月である。その後一九三七年にこれを全国紙に発展させた観のある『文藝復興』創刊にいたる満三年ばかりの間に、一五号が発刊された。目次には近藤をはじめ熊谷孝や西尾実の名がならび、後に『日本文学原論』に収められることになる近藤の諸論文や、鑑賞主義批判の論陣を張るかに見える論考が見られ、学派形成期の萌芽的なありようがうかがわれる。

以上述べたように、「歴史社会学派」が国文学研究方法における革新性やその後代に与えた影響は多大である。にもかかわらず、中心となった近藤忠義・石山徹郎・永積安明らのそれぞれの業績に関する評価はある程

度定まっているが、学派というまとまりにおいて総合的に評価・検討するという動きはそれほど多くなかったのが現状である。前述の「國文學誌要」「文藝復興」などの雑誌も、揃いで保管されているところは稀と言ってよく、極めて入手・閲覧が困難な状況であった。

しかし、国文学研究史に関する研究が盛んになるにつれ、その歴史的意義などを再検討・再評価する機運が生じてきた。更なる詳細な分析・研究をこの学派に加えるためには、基礎資料や年譜の整備が必要であると思われる。

## 2. 研究の目的

すでに述べたように、「歴史社会学派」は法政大学と深い関係がある。その最初期の論考は法政大学国文学会の機関誌「國文學誌要」に発表されたものであり、その学派に関わる多くの学者・研究者が法政大学で教鞭を執った。

本研究ではその関係性を最大限に生かし、本学関係者所有の資料を有効に活用しつつ、歴史社会学派の全体像を解明することを第一の目的とした。

具体的には、学派の中心的人物である近藤忠義・石山徹郎・永積安明をはじめ、『國文學誌要』『文藝復興』に依った重友毅・榊原美文・熊谷孝・佐山濟・鈴木福五郎ら、また藤村作や岡崎義恵・高木市之助・風巻景次郎といった周辺人物、さらには猪野謙二・益田勝実・小田切秀雄・広末保・西郷信綱ら主に戦後に旺盛な活動をした人々をも視野に入れ、彼らの業績や人物の再検討・再評価を行うための第一段階としての基礎作りをすることに他ならない。

そのために、学派の初期段階における活動の様態、方法論の革新性、学派の性格などを改めて分析・検討すること、あわせて今後の研究の基礎となる貴重資料のデータベース化を行うこと、さらに参考文献や年表などの整備を進めていくことなどが目指された。

## 3. 研究の方法

(一) 前記『國文學誌要』及び『文藝復興』の二雑誌ならびに『國文學誌要』のプレ雑誌ともいべき『日本文学の再認識』の、現存

するすべてのページを、写真撮影、CD-ROM 化し、それぞれの雑誌の性格や主張などを分析・検討する。あわせて、これも閲覧が困難な資料として、関連する文学紙「國文學新報」、などについても CD-ROM 化し、適宜参考とする。

(二) 研究分担者・共同研究者らと定例研究会を開き、近藤忠義・石山徹郎・永積安明ら学派の中心人物から、西郷信綱・猪野謙二・小田切秀雄・益田勝実ら後続の研究者について、主要著作を読み、その歴史的意義、現在における評価、歴史社会学派との関連などについて各論的に検討を加えていく。

その上で、歴史社会学派の全体像をできる限り明確にしつつ、個別研究としてもまとめていくという方法をとった。

(三) 前記研究者たちのそれぞれの活動・著作などが歴史社会学派全体の活動の流れの中でどのような位置をしめているか、またその出発と終焉の時期をいつごろと確定できるかなどについて明確にするために、個別研究と並行して歴史社会学派年表を作成し、その全体像を追究していった。

#### 4. 研究成果

相模女子大学図書館蔵の『文藝復興』全五巻、島本昌一氏蔵の「日本文学の再認識」、『國文學誌要』全一八巻、国文学研究資料館蔵の「國文學新報」全一八号（一号欠）など、閲覧困難な貴重資料を CD-ROM 化した。これらは、いずれはオンライン上で閲覧可能とし、研究者の益に供したい。

各論として、「近藤忠義・人と学問」第一集を二〇〇八年四月に、第四集を二〇〇九年三月に、「近藤忠義先生を偲ぶ会」との共編で発行した。第一集の内容は、伊豆利彦氏による講演「日本文学協会草創期の近藤先生」、山下宏明氏による講演「近藤先生の盟友 永積安明先生」の要旨、近藤忠義自身の未刊行原稿（大阪中央放送局で放送されたラジオ絵葉書「私のふるさと」、第六高等学校時代校友会誌に載せた短歌 4 2 首、同じく校友会誌掲載の演劇論 5 編）などの復刻およびこれに付した解説で構成されている。第四集は従来のもので可能な限り詳細に改訂した年譜および著述目録と、「私が啓蒙された人々」「心

ゆさぶる新しきもの」「四つの青春」などの自伝的著述を掲載した。

また、定例研究会においては、以下のような研究発表が担当者によって行われた。

- ・「歴史社会学派」再考——その成立期を中心に（衣笠正晃）
- ・「鑑賞主義論争」をめぐって（幸田国広）
- ・永積安明の思い出（杉本圭三郎）
- ・文芸学論争の中の石山徹郎——その理論的側面を中心に（藤村耕治）
- ・昭和初期の思想状況と「歴史社会学派」——マルクス（主義）受容とその展開をめぐって（伊藤博）
- ・高木市之助の昭和十年代——雑誌『文藝復興』に関連して（加藤博之）
- ・近藤忠義論序（島本昌一）
- ・近藤忠義『日本文学原論』第五章「町人文学論」について（加藤良輔）
- ・西郷信綱『日本文学の方法』を読む（加藤博之）
- ・小田切秀雄『万葉の伝統』『日本中世文学の展望』を読む（山中秀樹）
- ・歴史社会学派参考文献検討（齋藤秀昭）
- ・研究史の方法論について——「日本文学史研究」のころを起点として（野村精一による講演）

以上は今後順次論文化し、発表していく予定である。

最後に、二〇〇九年六月に「歴史社会学派研究・資料編」を発行し、総論として衣笠正晃「一九三〇年代の国文学研究——いわゆる『文芸学論争』をめぐって」（既発表・再録）、「國文學誌要」「文藝復興」の総目次と解題、参考文献一覧、歴史社会学派年表などを掲載した。これは、当該の学派の初期活動についての初めてのまとまった資料集であり、今後の研究の基礎を作ることができた。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ① 島本昌一、「二つの回想記よりの展望」、「第六高等学校とドイツ文芸学」、2008年4月、「近藤忠義 人と学問」、第一集、88～106頁、査読無

- ② 山中秀樹、「小田切秀雄と『歴史社会学』的方法」、2008年7月、「日本文学誌要」、78号、24～34頁、査読有
- ③ 島本昌一、「近藤忠義回想記解題」、2009年3月、「近藤忠義 人と学問」、第四集、52～61頁、査読無
- ④ 藤村耕治、「文藝復興解題」、2009年6月、「歴史社会学派研究・資料編」、巻該当無、34～37頁、査読無
- ⑤ 山中秀樹編、「歴史社会学派参考文献」、2009年6月、「歴史社会学派研究・資料編」、巻該当無、38～42頁、査読無
- ⑥ 山中秀樹・齋藤秀昭編、「歴史社会学派年表」、2009年6月、「歴史社会学派研究・資料編」、巻該当無、43～59頁、査読無

[学会発表] (計 0 件)

[図書] (計 3 件)

- ① 近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会編著、『近藤忠義 人と学問 第一集』、2008年4月、私家版、全111頁
- ② 近藤忠義先生を偲ぶ会・歴史社会学派研究会編著、『近藤忠義 人と学問 第四集』、2009年3月、私家版、全63頁
- ③ 歴史社会学派研究会編著、『歴史社会学派研究・資料編』、2009年6月、私家版、全60頁

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

なし

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤村 耕治 (FUJIMURA KOUJI)  
法政大学・文学部・准教授  
研究者番号：00328915

(2) 研究分担者

天野 紀代子 (AMANO KIYOKO)  
法政大学・大学院・兼任講師  
研究者番号：40222682

坂本 勝 (SAKAMOTO MASARU)  
法政大学・文学部・教授  
研究者番号：40267323

小秋元 段 (KOAKIMOTO DAN)  
法政大学・文学部・准教授  
研究者番号：30281554

日暮 聖 (HIGURASI MASA)  
法政大学・文学部・教授  
研究者番号：60257087

堀江 拓充 (HORIE TAKUMITSU)  
法政大学・文学部・教授  
研究者番号：20120834

勝又 浩 (KATSUMATA HIROSHI)  
法政大学・文学部・教授  
研究者番号：90161083

衣笠 正晃 (KINUGASA MASAOKI)  
法政大学・国際文化学部・教授  
研究者番号：50306429

杉本 圭三郎 (SUGIMOTO KEIZABURO)  
法政大学・名誉教授  
研究者番号：40061006

飯田 泰三 (IIDA TAIZO)  
島根県立大学・総合政策学部・教授  
研究者番号：00061218

(3) 研究協力者

島本 昌一 (SHIMAMOTO SHOICHI)  
元法政大学・兼任講師

山中 秀樹 (YAMANAKA HIDEKI)  
京華高等学校・教諭

齋藤 秀昭 (SAITO HIDEAKI)  
芝学園高等学校・非常勤教諭

加藤 博之 (KATO HIROYUKI)  
芝学園高等学校・教諭

伊藤 博 (ITO HIROSHI)  
法政大学院・博士課程

他多数